

第2回世界農業遺産勉強会

◇開催日 2015年12月14日

◇会場 中澤 ESD 研究室

◇参加者 祐岡、大西、山方、中澤

1. 山方先生の指導案「県のひろがり」

セールスポイント

①パフォーマンス評価

②パフォーマンス課題によって児童の思考が促される

③現実課題にありそうな問題 切実感

▼ループリックにはループリックを説明するループリックが必要になる

▼そこを担保するのは、複数の目が必要・相談が必要

④5つの視点は県の特徴をとらえる視点

『農業と人間 食と農の未来を考える』生源寺眞一、岩波書店、2013年

2. 序章（中澤）

- ・農業の場合、生産物という市場内部のものと同程度の重みで外部経済（環境への役割）の考慮すべき
- ・貿易の価値：比較優位によって、両国がウインーウインの関係が創り出される
- ・途上国であったときに農業の比較優位が保持されていたのが、経済の発展とともに、農業が比較劣位の産業に転じていく傾向がある。
- ・日本では、コメなどの穀類を大量に消費する伝統的な食生活が実質所得の上昇とともに、多彩なたんぱく質を享受する豊かな食生活に移行した。
- ・競争力の低下した品目（稲作）の問題点の一つは、レベルアップした技術的なポテンシャルを十分に生かし切れていないところ（農業機械など）
- ・技術開発の目標も増収志向から省力志向へ、そして環境保全が高いプライオリティに
- ・グローバル化は特定の国（アメリカ）の社会規範を軸に地球社会全体の制度を画一化する動き
グローバル化は画一化 ⇔ ESD は多様性の尊重
画一化されていいものと、そうでないものがあるだろう
- ・画一化（グローバル化）に対抗するためには、国民がその国の制度・文化への自覚を共有すること

3. 第1章フード・セキュリティ（大西）

- ・8億6800万の栄養不足人口
- ・栄養不足人口の改善は2007年 - 2008年までに達成されている。その後は横ばい
- ・地域的偏りがある
改善地域：東南アジア、東アジア、ラテンアメリカ
改善なし：サハラ砂漠以南のアフリカ
- ・マルサスの『人口論』
人口は等比数列的に増大
食料は等差数列的に増える
→ 食料が制約となって人口の増加が停止する
- ・先進国に限ってはマルサスの命題は過去のもの

食料生産の増大・人口転換（多産多死→少産少死）

- ・改善されていない地域においてはマルサスの罠は現実的課題

栄養不足人口の改善が横ばいになった理由

- ・2007年 - 2008年の穀物価格の上昇

オーストラリアの干ばつ、ヨーロッパの天候不順

エネルギー資源への転換

投機的な資金の流入

- ・今後の動向を握るもの

途上国の食生活の動向（経済成長は食料需要を押し上げる要因）

農業技術の進歩

窒素肥料投入による単収の増加⇔環境への影響

→ 表1-3はわかりにくい

- ・先進国のフード・セキュリティ

食の豊かさの確保を目的としたもの

- ・途上国のフード・セキュリティ

本来的な意味での食料不足

- ・不測の事態における食料不足（災害など）

（祐岡）FAOは途上国型

世界農業遺産は先進国型（特に日本の農業遺産）も含むもの

（中澤）フード・セキュリティとしての世界農業遺産の価値づけができるかもしれない

（祐岡）グローバル化・画一化とESD・多様性が切り口になるかもしれない

（大西）経済成長は食料需要を押し上げる・食生活が豊かになること

日本のような変容（豊かだが自給率は低い）はいいのか

豊かさの問い直し

自給率と自給力 地産地消の意味づけ 地域での食料サイクル